

令和六年度 書道講演会

本阿弥光悦の書の魅力

連盟副会長 小島 瑞 月

▼日時 令和七年一月二十六日(日)

▼会場 一宮商工会議所

▼講師 増田 孝 先生

支部集會に引き続いて、支部講演会を開催いたしました。

講師の増田孝先生は、現在愛知東邦大学客員教授・公益財団法人永青えいせい文庫評議員として活躍されており、テレビ東京「開運!なんでも鑑定団」の鑑定士で、全国的に有名な文学博士です。

先生は寛永の三筆(近衛信尹・松花堂昭乗・本阿弥光悦)の中の本阿弥光悦を、ライフワークとして研究され、多数の著書も執筆されています。

本日は先生がご手持ちの大変貴重な光悦の真筆の書状二通と和歌一首のお軸三本を、拝見させていただきました。真筆の素晴らしさとともに時代を感じる表装にも大変感銘いたしました。

今日はその二通の書状と和歌についての講演が行われました。

先生は必ず読みから入られるそうです。それにより本物か贋作か等判断できると



のことです。

一枚の書状は慶長五年頃で光悦五十才少し前に書かれており、字はどつしりと線に勢いがあり、太・細のメリハリとリズムがあります。光悦流を確立した時期と思われます。同時期に書かれた和歌一首は、カスレ無しで、のっぺりとしています。これは木版本の印刷ものです。当時は一枚の板に書いてそれを紙に写していました。紙は唐紙で、動植物等の大きな図柄が多く、それに負けない字にするにはと考え、このような書流が生まれたと考えます。

光悦は、五十五才頃に中風(脳血管障害)になり右半身が麻痺しました。病氣後に書かれたもう一通の書状は力が入らず、きちんとした字が書けておりません。それでも残っているのは、受け取り人が、書の魅力に惹かれて捨てきれずに持っていたからと思われます。

その後作陶に入り、国宝級の茶碗などを制作しますが、そのきつかけと、不自由な体でどのようにして制作したかを研究されています。

今後も魅力一杯の光悦に熱い想いを抱かれ、さらにライフワークとして研究に励まれる姿勢に感動いたしました。私も先生より刺激をいただき、書の勉強にさらに精進したいと思いました。

聴講者一〇四名

(内一般聴講者九名)